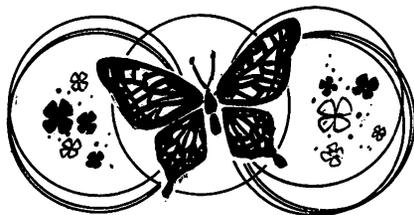


自然状態においてはナラガシワしか食べないこともあって、産地は局限される傾向がある。6月上旬頃より出現しはじめるが、中旬頃が最盛期であり、下旬には大破した個体が多くなる。同じ時期に同じ産地で発生するウラジロミドリシジミは、翅形及び翅の班紋の特異性によって他の種類と混同することのまずない種であり、大きさもやや小型である。これら両種は食樹の関係もあって、産地が一致している事が多い。

一方、より北部の山地に入るとヒロオビミドリシジミと近似種のハヤシミドリシジミが多産する所がある。食草がカシワに限定されているのと、県下におけるカシワの分布が極限されている関係もあって、産地はヒロオビミドリシジミにくらべてさらに限定されており発生時期も約20日ほど遅れて7月上旬中旬頃がその最盛期となる。同じ県北部の地に、ジョウザンミドリシジミ、エゾミドリシジミの両種も生活していることが知られており、その産地もかなり広いのではないかと考えられるが、今の所まだ十分な調査が行なわれておらず、詳しい所はわかっていない。

近年、建築材の生産のために、天然の広葉樹林の伐採がすすみ、より経済性に富み、より成長の早いヒノキやスギ等の二次林へと人為的に変化させられつつある。このことは、われわれのような蝶に関心をもっているものにとっては大問題であり、クヌギ、コナラ、ナラガシワ等の広葉樹をその食樹としている *Favonius* 属にとっては死活問題であろう。以前発見した新しい産地が、数年後にはスギ林に変化してしまっていて、がくぜんとした経験は私だけでなく大方の人が一度や二度は味わわれたことと思う。このような現実をまのあたりに見るにつけ、早急に県下におけるこれらグループの正確な分布を調査し、食樹林の保存を関係機関に働きかける必要性が痛感される。これらの愛すべき小動物が、この県下からその姿を消してしまうことのないよう何とかわれわれの力で努力したいものである。



ギフチョウの 飼育について

玉田 作次

前からカンアオイを少しばかり植えていた所、去年の或日、本会の木村先生から四月になればギフチョウの卵を少し分けてあげようと言われた。それからは幻の蝶の食草カンアオイの手入れを一層念入りにし、虫卵の届くのを一日千秋の思いで待っていた。五月五日になって木村先生が日ノ本学園に來られ待望の虫卵を13コ戴いた。2、3コはふ化していた。5月7日には全部幼虫になった。その13匹が一枚の葉の一ヶ所にびっしり体を寄せ合って集団を作るのである。

早速疑問が湧いた。蚕とちがって何故集団を作るのだろうか。

微量で動物の特定行動を誘起するものとしてはフェロモンがある。それも色々な感覚器官を刺激する。時には経口的に効くものもある。案外その外の原因かも知れない。例えば細い細いあの糸が集団を作る原因かも知れぬ。その他世話しながら色々考えた。しかし手をつける間もなくアットいう間に5月も過ぎた。6月1日には前蛹になった。

飼育してみると色々な疑問が次から次に出て来て科学心を呼びおこすものである。前述の幼虫の集団化の原因を好く利用すれば、害虫のアメリカシロヒトリ(集団となる)も一網打尽にされるはずである。

日ノ本学園の生物部は昆虫の飼育から出発しよう。ヒョウモンの飼育準備の為、三木先生(福崎町新)から世界最大のスマレ(パピリオナセア)を戴き来年の準備を始めている。

先輩諸兄の御指導、御援助を御願ひ致します。